
鶴の恩返し

悲劇のM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鶴の恩返し

【Zコード】

Z7247E

【作者名】

悲劇のM

【あらすじ】

鶴の恩返しに登場する鶴がシンデレラだつたらどうなるか、そんな妄想を文章にしてみました。

粉雪がちらつく雪原。木々は葉をすべて落とし茶色い枝を剥き出しにしている。降り積もった雪は深く、歩く者の足を吸い付けるよう位埋もれさせる。時折吹く冷たい風は、人間だけでなく厚い皮を被つた獣でさえ寒さに震えるほどだ。そんな雪原の道無き道をのんびりゆっくり行く若者の名は与表。薄い衣服はつぎはぎの部分がほとんどで、目深に被つた笠には少しばかりの雪が積もっている。背中には大量の薪が背負われていた。

与表が笠を人差し指で少し上げて上を見ると、誰に言ひでもなく呟いた。

「しかし、今日はよく降るな」

白い息が漏れ、笠の雪が少しばかり背中の薪に落ちた。

実際、今日はいつもより雪の量が多くなった。午前から降り出し、もう夕方前だというのに未だ止む事を知らない。おかげでもの凄い曇天だ。普段太陽が顔を出す時間帯をとっくに過ぎている。暫く歩いていると、遠くから鳥の鳴き声が風に運ばれてきた。こんな雪の中では鳥がいるのは珍しい。音のする方へ行ってみると、一羽の鶴が右足を鉄の罠に挟まれて苦しんで鳴いていた。寒さと痛みで体力をかなり消耗しているようだ。

慈悲のあつた与表は、鶴の右足に挟まっている罠を解いてあげた。すると鶴は翼を羽ばたかせ、やがて大きく動かすと、どこかへ飛んでいった。

それを見届けた与表は、この後の鶴の無事を祈りながら、また歩き出した。

与表は家へと戻った。見えるのは白銀の地面と雪化粧した山ばかり。そんな人気の無い所に与表の家はあった。冬以外の季節は山などへ山菜取りに出かけ、それを貯蔵する小さい蔵が家の横にぽつ

んと立つてゐる。木造の家の中は玄関からすぐ囲炉裏の間があり、そこで飯を作つたり暖をとつたりする。所々破れた障子の向こうは与表の寝室で、常に布団が敷かれている。もう一つの障子の向こうは死んだ母の寝室だ。母がよく使つていた機織も、今はすっかり埃にまみれてゐる。

与表は笠と取つてきた薪を床に置き、そこから薪を数本抜き取ると囲炉裏にくべて火をつけた。朱の炎がパチパチと音を立てながら家中の中を照らし暖めるが、方々から吹く隙間風がこの上なく鬱陶しい。

火の上に鍋を置き、そこに雪を大量に入れた。たちまち雪は水に変わり、湯気が上がつた。そこに味噌をかき混ぜた。と、その時『トントン』。戸口を叩く音がした。

風の音だらう。与表は気にせず横になつた。だが音は止まない。

与表は起き上がり戸口まで行くと、ゆっくりと開けた。

そこには、白い雪を背に一人の娘が立つていた。

長い黒髪から覗く顔は雪のようになじんで、整つた顔立ちは精巧な日本人形を連想させる。纏つた着物は赤い柄で美しく、細身の娘とよく調和していた。健全な若者なら振り返らずにはいられないが、与表はいつもと変わらぬのんびりとした表情である。

唇歯に震える唇で娘は言葉を紡ごうとしたが、与表が口火を切つた。

「こんな雪の中どうしたのですか？」

「ただ道に迷つただけよ！ つべこべ言わずに一晩泊め」

「それは大変だつたでしよう、入つて火にあたりなさい」

娘の言葉が終わらないうちに与表が言つた。同じように続けようとした娘だが、機嫌を損ねたのか頬を膨らませた。そして家中を見つめるなり

「ボロイ家だけど、あなたがそう言つたら泊まつてあげるわ」と言った。

与表は娘を囲炉裏の間に通すと、味噌汁を振舞つた。不味い不味

いと言ひながらも盛られた分全て食べた。相当腹が減つていた様子である。

食後、二人は囲炉裏の火を囲んで向かい合つように座つた。与表は胡坐をかき、娘は正座の姿勢を崩さない。長い着物を着ている故、自然にその体勢になる。

与表は娘を見つめた。

「な、何よ」

白い顔なので、赤くなっているのが簡単にわかる。その事には触れず、与表は言った。

「君とは一度どこかで会つたような気がするんだが、気のせいいか?」「ふんつ、あなたなんて知らないわよ」

与表は「そうか」と小さく言った。引っかかる思いを胸にしまい込み、窓に映る外の景色に視線を移した。広がるのは漆黒の闇と白い光を放ちながらまだ止まない雪。夜ももう遅いようである。

「そろそろ寝るか、使つてない寝室があるからそこを使つてくれ」亡き母の寝室を指差した。

「あ、ありがとう」

囲炉裏の火を消すと、一人はそれぞれ寝室に入った。

与表が布団に入り眠りにつこうとしたら、突然寝室の戸があけられ、娘が立つっていた。意表をつかれた与表に構わず、娘は言った。

「夜中、何があつてもあたしの寝室は覗かないでほしいの」

突然の申し出に与表は首を傾げたが、「いいよ」と首を縦に振つた。

夜中、与表は何かの物音に目が覚めた。

娘が寝ている寝室から聞こえてきている音で、一定の韻を刻んでいる。与表はその音に聞き覚えがあつた。機織の音だ。遠い昔、母が夜なべをして機織の仕事をしたものだつた。子供の頃はその音を聞かないと不安で眠れなかつた。与表は囲炉裏の間に出了。音をよく聞くために。

娘が一宿一飯の恩義で機織をしているらしいが、遠い日の思い出が蘇つてくるかのような懐かしい音に、与表は聞きほれた。やがて、障子の向こうで機織をしている娘を直に見たいという欲求にかられた。知らぬうちに母の姿と照らし合わせていたのだろう。与表は娘の寝室の障子に手をかけたが、「覗いてはいけない」という娘の言葉を思い出し手を引っ込んだ。

娘は何日も与表の家に世話をになつていた。だがその分甲斐甲斐しく働いた。与表が出かけると娘は家事をしながら家を守る。その光景は一組の夫婦のようだつた。娘は夜になるといつも機織をした。出来た布はこの世のものとは思えないほど美しく、魂の飛ぶような値で売れた。そのお金で家を大きくしたり烟を買つたりして、与表の暮らしあたちまちに良くなつた。そして与表は、いつしか娘に恋慕を募らせるようになつた。しかし娘は日に日に痩せ細つていつた。だが、医者に診てもらつてもいいものを食べさせてもよくならない。無理に機織をしなくてもいいんだよ、と声をかけたこともあつたが、娘は夜の機織をやめなかつた。

ある晩、娘のことが心配になつた与表は機織の音が聞こえてくる娘の寝室の障子に手をかけた。何故無理をしてまで機織をするのか、そこまで彼女を駆り立てるのは何なのか、そんなことを探るためにだが、覗いてはならないという言葉を思い出すと開けるのも躊躇わられる。

その間にも音は聞こえてくる。ちょっとくらいならいいだらう、与表はそう思い、そつと障子を数センチ程開けた。

その先の光景に与表は驚き尻餅をついてしまつ。なんと、機織をしていたのは娘ではなく、一羽の鶴だつたのだ。与表はその鶴に見覚えがあつた。右足の傷、いつか自分が助けた鶴だつた。鶴は自分の羽を一本ずつ抜き取りそれを機織に通していく。

尻餅をついた時の衝撃で鶴は与表に気づいた。すると、鶴を眩い光が包んだ。与表がまぶしさに小手を翳している間に光は消えた。

なんと、鶴は娘になつていた。突然の事に与表の頭の中はパニックだ。筋道立てて考えても何がなんだか全く理解不能である。そんな与表をよそに、娘は言った。

「察しの通り、あたしの正体はあなたに助けられた鶴よ」

与表は何故鶴が娘になつたのか、何故娘が鶴になつたのか、理解できなかつた。今までの人生でこんな事は絶無である。

「あれほど見ないでつて言つたのに、どうして見たのよ」

「じめん、どんどん痩せ細る君が心配になつたんだ」

ようやく言葉が紡げた与表。娘は一瞬だけ頬を緩ませるが、直後に凄い剣幕で怒鳴つた。

「そんなことどうでもいいわよ。正体がバレたらもうつ鶴の国に帰れないじゃない。どう責任とつてくれるの」「どう責任とれって言われても……」

すると、娘は完熟した林檎のように顔を朱に染めて、言つた。

「だ、だつたらこの地であたしをあなたの妻として正式に迎え入れて幸せにしなさい。じゃないと許さないんだからね……」

外の雪は、こつこつと止んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7247e/>

鶴の恩返し

2010年10月8日15時43分発行